

地域医療連携だより

かまんざ

病病・病診連携懇話会を
開催しました

② 第34回 病病・病診連携懇話会を開催しました

④ Red Crossニュース

スクラムを組む医療従事者たちVol.5 血液内科
救命救急センター 地域連携フォーラムを開催

⑥ 集中治療室における心停止蘇生後の治療について
がん市民公開講座「乳がんの最新治療」を開催しました
初診紹介事前予約についてのお願い

当日紹介・予約・診療に関するお問い合わせ

地域医療連携係



075-212-6186

平日 8:30～19:30
土曜日 9:00～13:00



第34回

病病・病診連携懇話会を



院長
小林 裕による挨拶



上京東部医師会
飯田 明男先生によるご挨拶



地域医療連携・入院支援室長
魚嶋 伸彦による講演

7月13日(木)、ホテルオークラ京都にて第34回病病・病診連携懇話会を開催しました。4年ぶりに対面のみでの開催とし、懇話会後の懇親会も、参加人数を制限してではありますが実施しました。懇話会では地域のクリニック、前方・後方連携病院の先生や職員の方々121名、懇親会では105名の参加をいただきました。久しぶりに地域医療機関の方々とface to faceでの交流の機会を持つことができ、大変有意義であったと感じています。

懇話会は、院長 小林裕、上京東部医師会 飯田明男先生のご挨拶のあと、地域医療連携・入院支援室長 魚嶋伸彦から「当院における地域医療連携の現状について」として、当院への新規紹介および当院からの逆紹介や転院依頼の現状を紹介しました。

続いて5名の医師から各診療科の新たな取り組みを紹介しました。はじめに糖尿病内分泌・膠原病内科部長 山崎真裕から「内分泌膠原病の病病・病診連携を深めるために」と題して、糖尿病を持つ人の診療で大切にしていることとして「糖尿病を持ちつつ生きることの大変さを、いかにところで理解できるか」という糖尿病診療の真髄のような話をさせていただきました。加えて1型糖尿病に対する最新のデバイスの紹介もしました。

2番目に、新しく今年4月に赴任した循環器内科部長 白石淳から「高出血リスクhigh bleeding risk (HBR)を有する冠動脈疾患に対する取り組み」と題して、薬剤溶出性バルーンを用いたstent free PCIなどのHBRを有する冠動脈疾患に対する当院の取り組みを、実際の症例の動画を提示し

開催しました



地域医療連携・入退院支援室長 魚嶋 伸彦



糖尿病内分泌・膠原病内科部長
山崎 真裕による講演



循環器内科部長
白石 淳による講演



外科医長
水谷 融による講演



泌尿器科部長 邵 仁哲による講演



感染制御部部长 盛田 篤広による講演



懇親会

つつ紹介させてもらいました。加えて腎機能が低下し、造影剤を使用できない患者さんにも用いることができる心筋シンチグラフィ（D-SPECT）の紹介もしました。

3番目に、外科医長 水谷融から「当院におけるロボット支援下大腸手術」と題して、当院外科で積極的に取り組んでいるDa Vinciを用いた大腸手術について現状を報告させてもらいました。また、胃領域のロボット手術もすでに開始していることも言及させていただきました。

4番目に、泌尿器科部長 邵仁哲から「光線力学診断（photodynamic diagnosis: PDD）を用いた経尿道的膀胱腫瘍切除術（TUR-BT）の導入」と題して、当院泌尿器科が導入しているPDDを用いたTUR-BTが、膀胱内の腫瘍の検出率向上および、がんの再発低下に大きく貢献することを講演

させてもらいました。

最後に、感染制御部部长 盛田篤広から、5類になって以降の新型コロナウイルス感染症についての最新情報、経口抗ウイルス剤などの薬剤の適応状況、診療時の感染対策などの情報提供をさせてもらいました。いずれも大変魅力的な内容で、ご参加の方々には満足していただけたと感じています。

一言ずつではありますが、各部長に壇上で話してもらったことは、文字通り「顔の見える地域連携」に大いに役立ったと考えています。来年こそは懇親会は参加人数を制限せず、さらなる交流を図れればと期待しています。地域医療連携・入退院支援課では、今後一層、地域医療機関との連携の強化に貢献したいと考えています。ご指導を何とぞよろしくお願い申し上げます。





病棟カンファレンス

(移植患者、重症患者、外来化学療法移行予定患者などの情報を医師、病棟看護師、外来化学療法室看護師、薬剤師、検査技師、移植コーディネーター、長期フォロー外来看護師で共有)



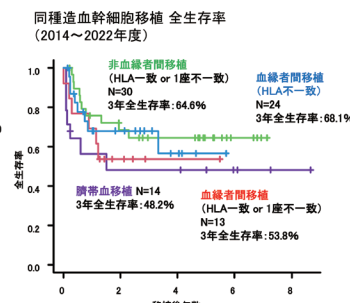
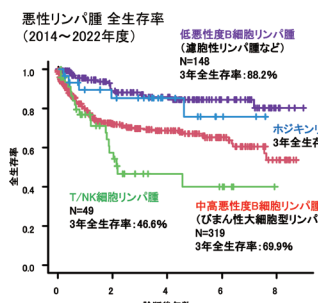
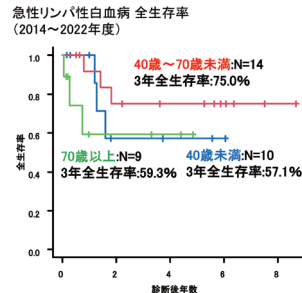
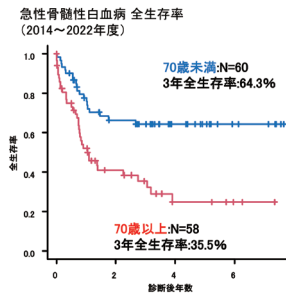
同種移植カンファレンス

(同種移植実施予定患者の治療方針を血液内科医師、放射線治療科医師、看護師、薬剤師、移植コーディネーター、理学療法士、栄養士、検査技師、医師事務作業補助者、医事課事務職員が一堂に会して議論)

過去7年間の主要疾患の

新規症例数と造血幹細胞移植件数 (年度)

	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
急性骨髄性白血病	10	16	13	18	19	15	15
急性リンパ性白血病	4	6	6	3	2	4	2
慢性骨髄性白血病	6	8	4	5	4	4	2
慢性リンパ性白血病	2	2	3	1	0	1	0
骨髄増殖性疾患	15	17	4	8	12	6	8
ホジキンリンパ腫	3	4	3	5	5	1	2
非ホジキンリンパ腫	61	63	58	66	52	65	67
骨髄異形成症候群	12	21	13	30	28	18	23
形質細胞腫瘍	19	18	15	16	11	13	25
自家造血幹細胞移植	11	6	5	3	3	4	7
同種造血幹細胞移植	11	14	14	10	12	8	9



救命救急センター 地域連携フォーラムを開催

救命救急センター所長
石井 亘

6月3日(土)、救急医療体制をより充実させるために、当院では初となる救命救急センターを主体とした病病・病診連携懇話会「救命救急センター 地域連携フォーラム」を京都ガーデンパレスにて開催しました。第一部ではWithコロナ時代の救急における当日緊急受け入れ依頼・紹介の現状、救命救急センターでのシステムについて、医師だけでなく地域連携課からも講演させていただきました。さらに今後のCOVID-19対応について各医療機関での役割に関する講演も行いました。

第二部では当院から救命救急センターの立ち位置を説明するだけでなく、救急告示医療機関やかかりつけ医院の先

生にもご参加いただき、緊急患者の受け入れ体制や転院などについての課題や問題点を、パネルディスカッション形式で行いました。病院やかかりつけ医院の先生や職員様、消防局などから総勢80名以上の参加をいただき、盛会のうちに終了しました。

救命救急センターの使命である三次救急を円滑に行う上で、地域の病院や医院と連携を緊密に図っていくことは喫緊の課題であり、本会がその課題などを共有し、方策を導き出せればと考えております。今後は継続的に懇話会などを行うことで、体制をより強固なものにできればと考えております。



血液疾患患者さんの治療や長期生存を目指して

当科の概要

血液内科は白血病、リンパ腫や骨髄腫などの造血器腫瘍とともに再生不良性貧血、特発性血小板減少性紫斑病、溶血性貧血などの非腫瘍性疾患まですべての血液疾患を診療しています。完全無菌室(クリーンルーム)8床を備え、7名の血液内科医がチームで診療に携わり、新しい治療法を積極的に取り入れ、先進的かつ最善の診療を迅速に提供し、血液疾患患者さんの治療や長期

生存を目指しています。

特に近年、造血器腫瘍の領域には高齢者にも適用できる画期的な薬剤が次々と承認されていますが、当科ではこれらの新規薬剤をいち早く導入し、治療成績の向上を得ています。また、コメディカルとともに質の高いチーム医療を実践し、より安全で満足度の高い医療の提供を図っています。

1

造血幹細胞移植への積極的な取り組み

自家造血幹細胞移植および同種造血幹細胞移植を各疾患・病期に応じて実施しています。また、近年はPost-CY法によるHLA半合致移植(ハプロ移植)を導入し、最も適切な時期に、しかもGVHDなどの移植合併症の少ない移植を行うことにより良好な成績を得ています。

2

新しいエビデンスの構築へ参加

当科は基本的には最新のガイドラインにのっとった医療を実践していますが、さらに多施設共同臨床研究に積極的に参画・参加することにより、保険診療では実施し得ない検査なども取り入れ、本邦において現時点で実施可能な先端的な医療を、患者さんの負担が増すことなく提供できるように心掛けています。

また、新薬の治験にも積極的に取り組んでいます。より治療成績の向上が望める新規薬剤の供給を受ける機会、現状ではもはや治療法がない患者さんに新たな治療を受けていただく機会を提供できることを目指し、現在も複数の新薬治験が進行中です。

3

個々の患者さんに寄り添った医療

治療不可能な患者さんや高齢の患者さんに対して、その言葉に耳を傾け、個々の異なる価値観を尊重し、QOLを損なわない医療を提供することも決して忘れないよう心掛けています。病棟スタッフと協力し、アドバンス・ケア・プランニング(ACP)の実践にも取り組んでいます。



1 開会の挨拶 院長 小林 裕



1



2



3

2 開会の挨拶 救命救急センター 所長(当時) 飯塚 亮二

3 パネルディスカッション

～臨床試験参加の取り組み～

集中治療室における心停止蘇生後の治療について

救急科 第2救急科部長 成宮 博理



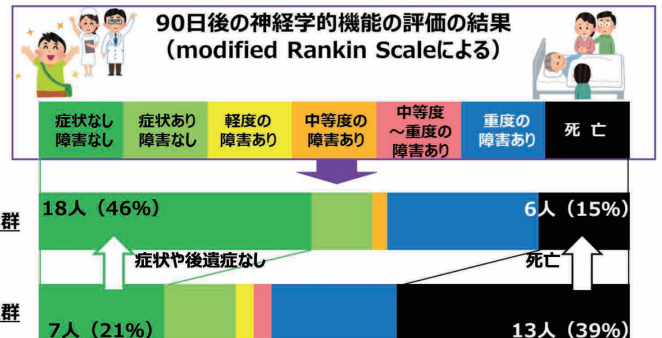
当院の集中治療室(ICU)において画期的な臨床試験が行われていました。7月13日(木)にテレビで取り上げられていたため、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。新型コロナウイルス感染症拡大前の2017年から開始されたこの研究は、慶應義塾大学を中心とした全国15施設が参加した二重盲検の試験「院外心停止後患者に対する水素ガス吸入療法の有効性の検討第II相試験:多施設介入研究」と言われるものです。

当院に搬入される心停止患者さんは年間300人を超えていますが、ほとんどの方はそのまま亡くなります。なんとかが自己心拍が再開しても多くの方が亡くなるか、障害を残して転院されていきます。そのような中でICUに入院された患者さんに対して2%



の水素ガスを吸入させることで、生命予後や神経学的予後を改善させるという治療です。図に示しますように、著しく予後を改善させる結果となりました(詳

しい結果はDOI:10.1016/j.eclinm.2023.101907を参照ください)。当院ICUでは最も多い症例登録を行い、本研究に貢献しました。まだ保険収載されておらず、日常診療で使用することはできませんが、今後もこうした研究にも参加し、ICUでの診療の質を高めていこうと考えております。



水素吸入療法が院外心停止患者の救命および予後の改善に効果-全国の救急医療機関で実施した臨床試験結果報告 -
<https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/files/2023/3/22/230322-1.pdf>
(参照2023-08-07)

がん市民公開講座「乳がんの最新治療」を開催しました

医療社会事業課/がん診療推進室

当院では地域がん診療連携拠点病院の指定に伴い、地域の皆様を対象に、がんの診療・治療に関する普及・啓発を目的に「がん市民公開講座」を毎年開催しております。

7月12日(水)に27回目を数えたがん市民公開講座では「乳がんの最新治療」と題して、当院から乳腺外科の医師3名と、一般社団法人ICAA認定 リンパ浮腫専門 看護師 看護係長の小郷 直子氏が、乳がんの治療と予防とケアについて講演しました。

今後も市民の皆様へ、がんに関する有益な情報を提供してまいります。



お知らせ 初診紹介事前予約についてのお願い

当院へのご紹介や患者さんが受診を希望される場合には、診療情報提供書を作成いただき、必ず医療機関から地域医療連携係まで予約をお願いします。

